

令和三年度 滋賀県立彦根東高等学校特色選抜 小論文

注意
* 答えは縦書きとし、解答用紙の決められた欄に書き入れなさい。
* 字数には句読点も含みます。
* 漢字は楷書、仮名遣いは現代仮名遣いで書きなさい。

* 2の答えは、原稿用紙の正しい使い方にしたがって書きなさい。

受検番号

次の文章をよく読んで、後の1、2の問いに答えなさい。

哲学はどうやって始まったのでしょうか？あるいは、哲学はどうやって始まるのでしょうか？アリストテレスの師匠であるプラトンは、その著作によって、今日知られている哲学の基礎を作った人です。そのプラトンは――そして弟子のアリストテレスも――哲学の始まりとは驚きであると言っています。

たとえば、あまりにも雄大な自然の光景を前にして、どうしてこのような美しいものが存在しているのだろうかと言葉を失った経験はありませんか？何億年の単位で語られる自然について知り、人間という存在のあまりの儂はかなさに思い至って、人間とはなんなのだろうかと考え込んでしまったことはありませんか？ふと自分の人生について思い、人生にはどんな意味があるのだろうかと思悩んでしまったことはありませんか？

こうした問いには答えがありません。より正確に言えば、人間の知性ではこうした根源的な問いに答えを出すことはできません。にもかかわらず、人間はしばしば答えのない問いに取り憑かれまます。プラトンの師匠であるソクラテスは「無知の知」で知られており、これは、「私は私が知らないということを知っている」という意味なのですが、ソクラテスがこれによって言いたかったのも、私たち人間にはどうにも振り払うことのできない無知が付きまといっているということです。

ではソクラテスは、人間は結局のところ無知であると確認しただけなののでしょうか。そうではありません。二〇世紀の哲学者ハンナ・アレントは、ソクラテスの無知の知を解釈して、こんなことを述べています。これは人間の無知という事実を確認しているのではない。何かに驚き、答えの出ない根源的な問いに付きまわれながら、自らの無知を経験することで、「人間は問いを発する存在として自ら確立するのだ」『政治的約束』。

問いを発するというのは、自らが抱いた疑問にとことん付き合い、それを疑問のままにせず、疑問を解こうとする営みです。プラトンやアリストテレスは、この過程の最初にあるのが驚きだと言ったわけです。ただ難しいのは、その驚きを維持することです。人間はしばしばプラトンたちの言う驚きを感じるがありますが、なかなかそれを維持しようとはしません。多くの場合、それを忘れてしまいます。なぜなら疑問を抱き続けるのはある意味では苦しいことだからです。

しかし、多少とも苦しいこの経験は人間にとってかけがえのないものです。答えの出ない問いを抱き続け、それを解けないにもかかわらず解こうと思いつけることで、人間は、問うとはどういうことなのかを学びます。だからこそ、答えの出ない問いを経験することで、人間は答えの出る問いをも発することができるようになる。アレントはそのように続けています。アレントによれば、科学こそは答えの出る問いを扱うものであり、科学はその起源を哲学に負っているわけです。

科学を含めた現存する諸学問は哲学に起源を持つ。そして、その哲学の起源は驚きであり、その驚きは答えの出ない問いをもたらす。ならば、いかなる学問も、潜在的にこのような驚きの経験を起源に持っていると言えるのではないのでしょうか。あるいは、いかなる学問に取り組みにあたって、このような驚きと答えの出ない問いの経験が大切であると言えるのではないのでしょうか。

（國分功一郎 『問いを発する存在になる』による。）

（注） アリストテレス、プラトン、ソクラテス Ⅱ いずれも古代ギリシャの哲学者
『政治的約束』 Ⅱ ハンナ・アレントの著書

1 傍線部のように、「科学がその起源を哲学に負っている」という理由を、哲学とはどういうことかを明らかにして八十文字以上、百字以内で説明しなさい。

2 あなたは、これまでどのようなことに驚いた経験がありますか、具体的に書きなさい。また、その驚きを、勉強や表現活動や自己の成長などに結びつけるにはどのような力が必要だと思いますか、自分の挙げた具体例に即して、理由とともに百四十文字以上、百八十文字以内で書きなさい。